



展望論文 (Perspective)

オートエスノグラフィーの方法論とその類型化¹⁾

土元 哲平・サトウタツヤ

(立命館大学 OIC 総合研究機構²⁾・立命館大学総合心理学部)

Methodologies of Autoethnography and Its Typology

TSUCHIMOTO, Teppei and SATO, Tatsuya

(Ritsumeikan University, Research Organization of Open Innovation and Collaboration /
Ritsumeikan University, Collage of Comprehensive Psychology)

Autoethnography (AE) is a generic term for descriptive studies in the social sciences wherein a researcher inquires into his own culture. One of the critical challenges for AE is how to construct AE based on the methodology from a researcher's personal experiences. In this paper, after first defining autoethnography, we identified the orientation of the following two mainstream methodologies: evocative AE and analytical AE. The former emphasizes the researcher's subjective feelings and the expressions that evoke emotions in the reader. Following in the tradition of ethnography and oriented toward generalization and theorization, the latter attempts to understand culture through the researcher's engagement with an event and reflection with its members. However, the methodology, which is the essential issue of AE - how to reproduce AE beyond "self-centered" accounts of the researcher's personal experiences - has not been discussed sufficiently. In addition, in light of the trends in AE research since 2000, it is necessary to examine and propose how the various AE methodologies can be organized (not only on the dimension of "analytic-evocative"). Therefore, this theoretical study aimed to examine the methodological orientation characteristics of previous studies related to AE and to provide suggestions on methodological possibilities of AE. As a result, two dimensions - stance (personal understanding- others and commonality understanding) and writing (subjective-intersubjective) - were set as frameworks to organize the methodological orientation of AE, and these orientations were named "autobiographical orientation," "interactional orientation," "ethnographic orientation," and "deliberative orientation." Finally, we proposed the possibility of methodological discussions in AE from the perspective of research techniques and writing.

オートエスノグラフィー (AE) は、社会科学において研究者が自ら有する文化 (own culture) を探究するための記述的研究の総称である。本研究では、まずオートエスノグラフィーについて定義した後に、主流な方法論である喚起的 AE と分析的 AE について確認した。前者は、研究者の主観的な感情を重視し、読者に感情を喚起させる表現を重視している。後者は、伝統的なエスノグラフィーを引き継ぎ一般化・理論化を志向しながら、ある出来事に対して研究者が関与し、そのメンバーと共に反省を行うことで文化を理解しているとする。AE にとっての重要な課題の一つは、どのような方法論に基づいて、研究者の個人的経験から AE を構築するかという点にある。しかし、研究者の個人的経験をどのように「自己中心的」な記述を越えた AE としていくのかという方法論は、AE の本質的な課題であるにもかかわらず、明確に論じられてこなかった。また、2000 年以降の AE 研究の動向を踏まえ、多様な AE の方法論を（「喚起的-分析的」という次元だけでなく）どのように整理できるかについても検討・提案していく必要がある。したがって、本稿では、AE の研究蓄積をレビューし方法論的志向の特徴を整理すること、AE における方法論的な可能性について示唆を得ることを目的とした理論的検討を行った。結果的に、AE の方法論的志向を整理する枠組みとして「姿勢」（個別性理解-他者・共通性理解）と「著述」（主観的-相互主観的）という二次元を設定し、各象限を自叙伝的志向、相互行為的志向、エスノグラフィー的志向、熟慮的志向と命名した。最後に、研究技法・著述の観点から、AE における方法論的議論の可能性を検討した。

1) 本稿は、立命館大学に提出された博士論文（土元, 2020）の一部を加筆・修正したものである。

2) 現所属：日本学術振興会・大阪大学 (Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science, Osaka University)

Key Words : autoethnography, evocative autoethnography, analytic autoethnography, research methodology
 キーワード : オートエスノグラフィー, 喚起的オートエスノグラフィー, 分析的オートエスノグラフィー,
 研究方法論

I . 序論

1. オートエスノグラフィーとは

オートエスノグラフィー (autoethnography; 以下, AE) は, 社会科学において, 研究者が自ら有する文化 (own culture) を理解することを目的とした記述的研究の総称である。AE は, ethnography に接頭辞 auto がつけられたものである。オックスフォード英語辞典によれば, ethnography が「体系的な研究と人びと, 社会, 文化の記述」を指し, 1811 年頃から取り組まれたものであるのに対し (Oxford University Press, 2014), autoethnography は掲載されていない。このことから AE が比較的新しい語であることがわかる。Adams & Herrmann (2020) は, AE を次のように定義している。

オートエスノグラフィー的なプロジェクトとは, 「自分らしさ・主観性・個人的経験」を, ある 1 つのグループあるいは文化における「信念・実践・アイデンティティ」の「記述・解釈・表象」を行うために用いるものである³⁾ (Adams & Herrmann, 2020, p.2)

この定義は, auto が AE の対象 (素材) を, ethno が目的を, graphy が方法を示すものとして練り上げられており, 必要にして十分であるといえる。ただし, AE は過程であり所産である (Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。また, ethno という語について付言しておく, この語はかつて民族という訳を用いられることが多く, したがってエスノグラフィーを民族誌と訳すこともあったが, 現在では“人びと”という意味を持つとされることが多い。なお, ある

3) カギ括弧は筆者による。この定義の原文においては, 「自分らしさ・主観性・個人的経験」が auto, ある 1 つのグループあるいは文化における「信念・実践・アイデンティティ」が ethno, 「記述・解釈・表象」が graphy というオートエスノグラフィーの構成要素を示すとされている (Adams & Herrmann, 2020)

実践に参加している人びとの用いる方法論を探求するアプローチであるエスノメソドロジーのエスノも“人びと”という意味となっている (前田, 2007)。

AE は, 1970 年代にエスノグラフィーから派生したジャンルであり, 研究者の主観性を文化 (人びと) の理解に結びつけることに関心を持つものである。エスノグラフィーは, ある特定の人びと・社会・文化に関心を向け記述や分析を行うものである。また, その著述はモノグラフ (ある社会・集団・家族等に対する包括的な調査報告) の形でなされることが多い。なお本稿では (オートがつかない) エスノグラフィーについて, 1920 年代から 1960 年代までの客観的な記述を重視する伝統的なエスノグラフィーと, 1990 年以降の新しい潮流として現れた現代のエスノグラフィーとを区別する。ここで, 伝統的なエスノグラフィーとは, 実証主義を前提とした方法として行われてきた客観的な記述を重視するエスノグラフィーを指す⁴⁾。現代のエスノグラフィーでは, エスノグラフィーの著述過程においても, 言語やレトリック, メタファーなどが現実を構成するという観点を重視している。そこでは, エスノグラフィーの著述を, フィールドワークのような調査・研究の「終わりにくる総ざらいの営み」 (Richardson, 2000/2006; p. 315) と考えるのではなく, ある現実を理解し, ナラティブとして再構築していくためのプロセスや「探求の方法」として捉えている (Richardson, 2000/2006 を参照)。

4) エスノグラフィーは, 伝統的には実証主義を前提とした方法として行われていた。実証主義は自然科学を源泉としており, 観察可能な客観的な現実が存在し, 研究者は経験的手法を用いてその現実を明らかにできるという前提がある (Denzin & Lincoln, 2000/2006; Prasad, 2005/2018)。また, 経験的事実のみを知識の唯一の源泉として認め, 感覚的経験によって確認できない超越論的実在や形而上学的実体を否定する哲学的立場とも説明される (東村, 2018)。このような理論的志向を持ったエスノグラファーは, 現場や人びとの現実の「ありのまま」の, 客観的な姿を表象・再現 (representation) することを目指してきた。この時期のエスノグラファーには, 客観的な記述を重視する見解が支配的であった (Rosaldo, 1989/1998)。

ただし、AEは“当事者による主観的な研究”と過度に単純化して理解される場合がある。近年では、AEは、社会科学の研究アプローチとして一定の地位を得ており、様々なテーマでの実践が見られる。しかし、それによって、事例研究や実践報告のような著述形式で描かれたモノグラフや、既存の質的研究法を自己分析に適用した研究が、主観的な分析であるという理由だけで、AEと混同されるという問題点も生じている。むしろ、“当事者の主観的な経験を理解する”という点は、AE（特に喚起的AE）にとっての重要な意義の一つである。しかしながら、この点がAEの方法論的な特徴として過度に強調されていることによって、AEがどのような人間理解を目指しているのかという本質的な点が理解しづらくなっていることがここで問題にしたいことである。また、AEを“当事者による主観的な研究”と単純化して理解することは、実際には拡がりを持っているAEの方法論の多様性を覆い隠すという問題点にも繋がる。以上のような現状を乗り越えるためには、“当事者による主観的な研究”という視座とは異なる視座からAEを再定義し、強調することが必要となる。結論からいえば、本研究ではAEの方法論的志向の4つの類型によってAEを再定義することを提案する。

上記のような問題関心から、本稿においては、AEの方法論について検討していく。ここで、本稿における方法論という語の意味について述べたい。Schwandt (2007/2009) は、方法論において説明さ

れ定義づけられる観点を以下の7点に整理している(表1)。ここで示されるように、方法論という語は、研究デザイン、妥当性や一般化可能性、データ分析や解釈、結果の記述や考察まで広く含んだ概念である。

本稿では方法論を、研究対象となる現実(現象)を理解するための「ものの見方」や手続きの総体として捉えている。また、AEの方法論をレビューし類型化した結果として、AEにとって特徴的な方法論の次元は、姿勢、研究技法、著述という3つであると考えている(表1)。これらは互いに絡み合っており分離することが難しいが、何を目的にAEに取り組み(姿勢)、どのようにデータをとって分析・解釈し(研究技法)、誰を対象にどのように表現するか(著述)、というプロセスの問題として捉えることができる。こうした視点をもってAEの方法論を論じていくことは1つのあり方であろう。

2. 喚起か分析か：AEにおけるスペクトラム

AEの主流の方法論として、喚起的AE (evocative autoethnography; Bochner & Ellis, 2016; Ellis & Bochner, 2000/2006) と、分析的AE (analytic autoethnography; Anderson, 2006a) という2つにわけて言及されることがある(例えば、Allen-Collinson, 2013; Chang, 2008; Chang, Ngunjiri, & Hernandez, 2013; Tedlock, 2013; Wall, 2016)。以下ではこれらの方法論が、いかなる志向性を持っているのかについて簡潔に整理してみたい。

表1 Schwandt (2007/2009) による方法論の観点と本稿における方法論的次元との関連

Schwandt(2007/2009)による方法論の観点	関連する方法論的次元 (本論)
1) 調査研究する価値のある問題はどのような種類のものか。	姿勢
2) 研究可能な問題や検証可能な仮説とはどのようなものか。	姿勢、研究技法、著述
3) 特定のデザインや手順を用いて調査研究できるような形に、いかに問題を枠づけるか。	姿勢、研究技法、著述
4) 正当で保証された説明とはどのようなものかを理解する方法。	姿勢、著述
5) 一般化可能性の問題をどのように判断するか。	姿勢、著述
6) データ生成のための適切な方法をどのように選びどのように発展させる	研究技法
7) 問題、データ生成、分析、論証の間の論理的な関連づけをどのように発展させるか。	研究技法、著述

(Schwandt, 2007/2009, p.208 より筆者作成)

喚起的オートエスノグラフィー

喚起的 AE は、単に自己の経験を記述することを目的とするものではない。むしろ、論文の読み手が「物語についてではなく、物語をとおして」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.131) 自らの経験を内省したり、感情を喚起することが目的なのであり、AE は、そのためのコミュニケーションの媒体として位置づけられる。したがって、喚起的 AE にとって重要なのは、「読者との対話」となる⁵⁾。エリスとボクナーは「読者が、自分の視点から、自分の生活経験に由来する観点から、対話へと参入できる」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.148) ことが重要であると表現している。その著述形式としては、分析的な記述や一般化された記述が用いられるのではなく、「短編小説、詩、種々の創作、長編小説、フォト・エッセイ、随筆、日誌、アンソロジー、社会科学的散文」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.136) のような著述形式が取り入れられている⁶⁾。それによって、従来の社会科学が採用してきた、一般的な学術論文の形式では捉えきれなかった、新しい人間理解のモードを発展させようとしているのである。

5) ここで、「喚起的 AE だけでなく通常の論文であっても、読み手は論文を能動的に読んだり、対話を行ったりしている」とも考えられるが、Ellis & Bochner (2000/2006) の主張は、そうした考え方は根本的に異なっている。Ellis & Bochner (2000/2006) は、「物語について」ではなく「物語によって」人間を理解するという重要性をラディカルに主張している。これは、Bruner (1990) の言葉で言い換えるとすれば、ある人の意味づけの行為 (act of meaning) を解釈するというよりは、テキストと読者との意味づけの行為 “として” AE を実践するということになる。さらに、Ellis & Bochner (2000/2006) は、著述の様式によって現象の理解が変わるという点を重視しているため、一般的な科学論文が採用する「目的・方法・結果・考察」のような固定化された様式で AE を書くことや、人間の行為を客観的・三人称的に記述するという意味での分析を拒否している。こうした形式は、人間の日常生活で用いられる言語と乖離していると考えているからである。著述の形式が変われば、読者が応答するための言語も変容する。日常生活に近い言語で、読者である他者と対話を重ねていく、そのようなコミュニケーションに基づく人間理解と、そのための学術コミュニティの形成が AE の主眼であると考えられる。以上のような意味で、読者を AE の「対話的な共同参加者」と考えることは、喚起的 AE の中核的な志向に結びついている。

6) このような社会科学の従来の慣習を抜け出たエスノグラフィーを、Richardson (2000/2006) は「創作的かつ分析的な実践に基づくエスノグラフィー (creative analytic practice ethnography)」(CAP エスノグラフィー) と総称している。

喚起的 AE の射程が、社会科学における研究のあり方に対する批判にまで及んでいることには注意を要する。すなわち、喚起的 AE においては「研究のゴールを根本的に変革すること、つまり記述からコミュニケーションへと変えることが必要」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.147) であると主張されている。具体的には、Ellis & Bochner (2000/2006) は Frank (1995) による “*The Illness Narratives: Suffering, Healing, and the Human Condition* (病いの語り——患うこと、癒し、そして人間の条件)” を取り上げ、「研究のゴールは、病いや障害が引き起こすレッテル貼りや差別を少なくすること」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.148) であり、「語りを、エンパワメントの源として、規範的な語り方による支配やその権威に対抗するための抵抗手段として、利用」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.149) していると評している。喚起的 AE の論者は、「心のこもった著述」によって社会的世界を変革しようとしているといえる (Denzin, 2006; Pelias, 2004)。

以上、喚起的 AE においては、ある出来事の学術的文脈よりも、生活上・実践上の文脈の中での位置づけが重視される。それは、喚起的 AE が、いわば「自己物語を介した対話的・共感的なコミュニケーション」の実践を目指しているからである。つまり、日常的な経験から自己物語を著述することによって、読者がテキストと対話したり、共感するようなコミュニケーションに参加したりすることを促しているのである。

分析的オートエスノグラフィー

分析的 AE (Anderson, 2006a) では、喚起的 AE とは対照的に、主観性よりも客観性、個人よりも他者との協同を重視している。また、個人的な文脈を提示することよりも、その経験を分析し一般化・理論化することを重視する。

分析的 AE の鍵となる特徴は、(1) 完全なる成員としての研究者 (complete member researcher) の状態、(2) 反省 (再帰性) への持続的な注意、(3) 研究者の自己物語の可視性、(4) 自己だけでなく “データ” や “他者” との対話、(5) 理論的分析への貢献、であるとされる (Anderson, 2006a, p.378 の

表現を一部変更)。なお、反省という用語は、研究者が他者やフィールドでの相互作用に影響を与えていることを自覚し、その相互影響について捉え直す行為を指す。これには自分の偏見や主観性についての最小限の自覚から、研究を完全な自伝的分析の中に位置づけて理解するものまで幅がある (Banks, 2007/2016)。

分析的 AE は、個人に焦点化しすぎないために、「完全なる成員としての研究者」としての集団内部の視点や、研究プロセスにおける他者との協同的な内省を強調する (Anderson, 2006a, 2006b)。これは、喚起的 AE が研究者の主観性を強調するのと対照的である。この特徴によって、研究者が単独で経験を反省するのではなく、周囲の人びとと協同して行う反省も、AE として位置付けることができる。それによって、「私たち自身や、コミュニティやより広い社会世界での私たちの場所をより豊かに理解し定義するために、集合的经验と相互作用を用いながら、研究しているサブカルチャーの他のメンバーと反省的な談話に参与する」(Anderson, 2006b, p. 453) ことが可能となるのである。

3. 問題と目的：オートエスノグラフィーにおける方法論の課題

ここまで、AE の主流の方法論である、喚起的 AE と分析的 AE について整理してきた。前者は、研究者の主観的な感情を重視し、読者に感情を喚起させる表現を重視している。後者は、伝統的なエスノグラフィーを引き継ぎ一般化・理論化を志向しながら、ある出来事に対して研究者が参与し、そのメンバーと共に反省を行うことで文化を理解していこうとする。

ところで、AE は、“自己中心的”あるいは“ナルシスト的”な記述になる可能性がある指摘されることがある (Anderson, 2006a; 沖潮, 2013) が、ある研究が完全に自己中心的でナルシスト的なものであるとすれば、それは AE ではない。自己についての記述が、自叙伝ではなく AE であるためには、主観的な記述であっても、その記述が他者や社会的文脈と関連づけられる必要がある。喚起的 AE では、研究者の個別的な経験を前景化することによって、

読者との対話を促し、そのコミュニケーションの過程で主観的な視点を社会変革のために用いようとしている。また、分析的 AE では、自己中心的な記述を乗り越えるために、上述した (2) 反省 (再帰性) への持続的な注意、(4) 自己だけでなく“データ”や“他者”との対話といった特徴が重視される。喚起的 AE や分析的 AE において、自己中心的な記述を超えることは、必要条件としてそれぞれに共有されているのである。このように「自己中心的な記述を超える」ことは、AE にとっての必要条件の一つであり、そのために、研究者の個人的経験から、どのような方法論に基づき AE を構築するかという議論が不可欠である。しかしながら、上述のように、現状の AE に関する議論では、“当事者による主観的な研究”という点が強調される一方で、方法論についての議論が充分になされているとは言いがたい。

さらに、AE の方法論に関する最近の動向を鑑みても、AE の方法論について整理することの意義が指摘できる。喚起的 AE と分析的 AE という両者の方法論は、それぞれ、自己物語を書くという“自叙伝的”な特徴と、文化的解釈を行うという“エスノグラフィー的”(ethnographic) な特徴を示している。そして、両者は排他的で分離されたものというより、連続体 (スペクトラム) とみなされている (Allen-Collinson, 2013; Chang et al., 2013)。Chang et al. (2013) によれば、研究者は自らの AE を“喚起的-分析的”という連続体の中に位置づけることができるという。こうした立場では、すべての AE に喚起的な側面 (読者との対話を志向) か、分析的な側面 (理論的分析、客観性を志向) が含まれるものとして捉えていることになる。しかし、2000 年以降、多様な志向を持った AE の方法論が登場している。これらの新しい方法論は、喚起的か分析的かと単純に整理することが難しくなりつつある。つまり、2000 年以降の AE 研究の動向を踏まえ、こうした多様な方法論を (“喚起的-分析的”という次元だけでなく) どのように整理できるかについても検討・提案していく必要がある。

以上から、本稿では、AE に関連する研究蓄積をレビューしその方法論的志向を整理することで AE

の全体像の理解を図る。それによって、これまでのAEに対する“当事者による主観的な研究”という主流の理解に対するオルタナティブな見方として、方法論という観点からAEについて再定義する可能性を提案したいのである。近年では対人援助学研究（例えば、保育、教育、看護など）においてもAEが試みられている。しかし、前述した通り、こうした領域でもAEは“当事者による主観的な研究”として理解される場合がある。本研究は、AEが目指す人間理解の方法論を明確化することで、当事者（支援者）による主観的な視点だけでなく、他者（被援助者や同僚）との関係性や文化をどのように理解し著述していくのかについて、一つの見方を提供するという点で対人援助学研究の進展に寄与するものである。

4. 文献レビューと類型化の方法

本稿で行った文献のレビューと類型化の手順を以下に記述する。手順1, 4でレビューした文献については、資料にリストを掲載した。なお、この整理は、最初から縦軸と横軸の次元を設定し、それに方法論を配置していったものではなく、下記の(1)～(6)という手順によって、ボトムアップな整理法を用いて生成したものである。整理にあたっては、“喚起的－分析的”という次元とそれに対して直交する(独立な)次元を設定することもできたが、この2つの方法論が連続しているということはAEの方法論に関する研究群において一定の了解がなされていることから、それらの研究群と対応するために“喚起的－分析的”という次元を2つの成分に分解する方法をとった。

(1) オートエスノグラフィーを体系的に整理した先駆的著作であるエリスとボクナー(2000)によって引用・紹介されている著作(理論的・方法論的背景についての解説, AEに類する研究実践)や、2013年に出版された“オートエスノグラフィーのハンドブック(*Handbook of Autoethnography*)”(Holman Jones, Adams, & Ellis, 2013)の各章を中心に、AEという語が創出された1979年から2020年代のAEに関する著作をレビューし

た(約60件)。

- (2) 手順1のレビューを踏まえ、AEの方法論として体系的に整理されており、書籍として出版されているなど広く認知されているものを抽出した。具体的には、喚起的AE, パフォーマンスAE, 分析的AE, 組織的AE, 協同的AE, デュオエスノグラフィーを抽出した。
- (3) 喚起的AEは自叙伝的な志向, 分析的AEはエスノグラフィー的な志向を持っている(Chang et al., 2013)ことから、これらに対極(今回は第1象限と第3象限)に配置した。
- (4) 2008年から現在までに刊行された日本語の著作(約30件)をレビューした。
- (5) 手順2で抽出したAEの各方法論を類似性・異質性に基づいて空間配置した。その際、日本語のAE実践が採用している方法論も包含できる軸の設定を心がけた。手順1, 4のレビューを通して得られた結果として、AEの研究技法(データ収集や分析・解釈)は多岐に渡っており、その違いによって空間配置を行うことは困難であった。そこで、「個別性理解」-「他者・共通性理解」と「主観的著述」-「相互主観的著述」という対極的な傾向を設定することで、AEの方法論を空間配置した。これらの対極によって作られる次元を、それぞれ方法論の〈姿勢〉と〈著述〉として命名した。
- (6) 手順5と並行して、次元を設定したことによって生み出された新しい類型(相互行為的志向, 熟慮的志向)を命名した。

II. オートエスノグラフィーの方法論の広がり捉える2次元と4類型

以下では、喚起的AEと分析的AEを含めて、AEの方法論の広がりを整理するための枠組みを提案したい(図1)。AEにおいて、研究対象である自分自身や他者に対して、どのような「姿勢」で関わるかについては、対照的な志向がみられた。また、AEは様々な著述の形式や過程で描かれるが、「著述」の際に取りうる視点のあり方についても対照的な志向がみられた。そこで、著者らは図1のように、

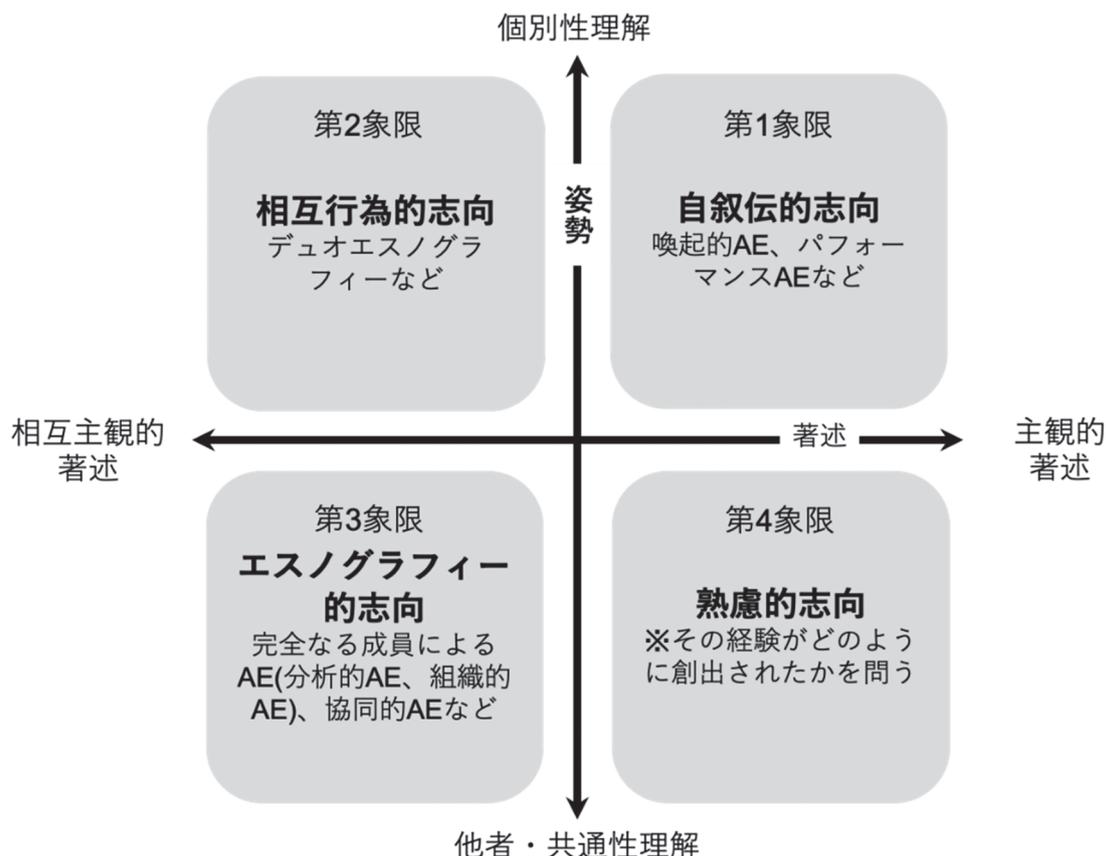


図1 AEの方法論的志向それぞれが重視する姿勢（縦軸）と著述（横軸）

AEの方法論について〈姿勢〉と〈著述〉という2次元と4つの象限を利用した類型化を試みた。図1において、各象限は“方法論的志向”を、その中に記述される例は“方法論”を示している。例えば、第1象限は自叙伝的志向と命名される方法論的志向である。この具体例となるのが、喚起的AE、パフォーマンスAEといった方法論である。なお、熟慮的な志向については方法論的な議論が十分ではないという現状があるため、説明のみを記載している。以下では、各次元と象限（志向）について説明していく。また、AEの各方法論についても同時に説明していく。

1. オートエスノグラフィーの方法論の広がりをつめる次元

〈姿勢〉の次元：「個別性理解」-「他者・共通性理解」

〈姿勢〉とは、何を目的にAEを実践するのかという態度であり、その両極として「個別性理解」と「他者・共通性理解」を設定した。

個別性理解に関して、喚起的AEでは、最終的に

は物語を介した読者との対話を目指し、それによる社会の変革を意図しているが、1つのAE実践の中では、研究者の個別性の理解が目指される。また、デュオエスノグラフィー (Norris, Sawyer, & Lund, 2012; Sawyer & Norris, 2013, 2015; 後述) や、対話的自己エスノグラフィ (沖潮, 2013) などでは、対話という手段を用いるが、一般性というよりも自己や現象の個別性理解を強調する。

他方、AE実践の中には、他者理解や共通性の理解を志向するものもある。たとえば、Anderson (2006a) は、文化人類学者 Murphy による “*The Body Silent: The Different World of the Disabled* (ボディ・サイレント——障害者の異質な世界)” (Murphy, 1987/2006) について、「深く個人的で自己-観察的 (self-observant) なエスノグラフィーは、広い理論的問題を扱うために、個性記述的な特殊性を超越できることを力強く示す」(Anderson, 2006a, p.379) ものであると述べている。この “*The Body Silent*” は、Murphy (1987/2006) が身体麻痺を患った自らの感情や経験、身体麻痺者と社会との関係について文化

人類学的な視点から描いた著作である。個人的な経験を(時には他者とともに)深く自己観察し、分析していく中で開かれた他者理解や、経験の共通性を記述するという志向も AE にとって重要な側面である。

ただし、ここで提案する2つの次元は、現在の AE の方法論的志向を相対的に理解し、新しい方法論的な志向を検討するための一つの媒介手段であり、主観性と相互主観性、個別性理解と他者・共通性理解を、容易に区分したり切り離したり出来ると主張するものではない。

〈著述〉の次元:「主観的著述」-「相互主観的著述」

〈著述〉とは、AE の物語を著述する際の視点であり、その両極を「主観的著述」と「相互主観的著述⁷⁾」と名付けた。

「主観的著述」では、研究者がある出来事に対する独自の感情や感覚を示したり、研究者が用いているレトリックや支配的言説を明らかにすることがある。ただし、主観的とは、研究者が他者や社会と“独立に”あるいは“いかなる影響も受けずに”研究を行い著述するという意味ではない。AE において記述の対象となる経験が、他者との相互作用や文化、社会的な影響によって構成されていることを前提とした上で、研究者の視点を重視するという意味である。

一方、「相互主観的著述」とは、他者と共に、あるいは他者を介して自己の経験を語るという相互行為に基づく著述を意味する。このような AE は、多くの場合他者と共に取り込まれるが、広義の他者(テ

クスト等を含む)を通して可能である。例えば、中島・花家(2012)では、劇作家の如月小春(1956-2000)が残した記述との仮想的対話を通して、芸術教育実践に関する AE が記述されている。

〈姿勢〉・〈著述〉の次元がもたらす4類型

以上のように2次元を設定することで、これまでの「喚起的か分析的か」という AE についての理解を広げ、現在までの方法論の多様性を包含する4類型を設定することができる。これらを図1上で命名するとすれば自叙伝的志向(第1象限)、相互行為的志向(第2象限)、エスノグラフィー的志向(第3象限)、熟慮的志向(第4象限)となる。以下では、それぞれの象限ごとに見ていきたい。

2. オートエスノグラフィーの方法論の広がりをつまえる類型

第1象限: 自叙伝的オートエスノグラフィー(個別性理解×主観的著述)

まず、喚起的 AE のように、その人の個別的な側面を理解しようとする AE の志向がある。この志向を自叙伝的志向と呼ぶ。この志向に基づく AE では、研究者が持つ主観的な感覚や感情に注意を向け、その経験を文学的な工夫(レトリックやメタファーなど)によって表現・理解していく。

パフォーマンス AE (Denzin, 2018) もこの志向に位置づくものである。この例として、Moreira (2012) による「鶏の胸肉が嫌いな理由」についての AE がある。この AE には、以下のような幼少期の出来事の記述が含まれている。

私たちきょうだい⁸⁾は、台所で座って夕食を食べている。おばあちゃんはストーブと食卓の間を走り回り、すべてうまくいっているか確かめている。食卓の上座には、一人の男も座っている。そこは、いつもなら空の椅子が置かれている場所だ……いつも私たちきょうだいは、その鶏の胸肉を分け合うが、今日は違う。この男が食べに来たときは、その胸肉は彼のものである。誰がその鶏肉に代金を払ったかは関係ない。どれくらいの期間、

8) 原文では "Sister and I" である。

7) この「相互主観性」は、Intersubjektivität の訳語である。浜渦(2012)は、Intersubjektivität には3つの次元があり、それらを日本語で訳し分け区別できると提案している。すなわち、「(1) 主観と主観の間に、主観の意識的・能動的な働き以前に前意識的・受動的に生じる、むしろ『間身体性 intercorporité』(メルロ=ポンティ, M.) とも呼ぶべき次元を『間主観性』という語で呼び、(2) 主観の意識的・能動的な働きにもとづいて、それぞれの動機と理由と目的をもって行われる相互行為ないし実践によって成立する次元を『相互主観性』ないし『相互主体性』という語で呼び、(3) 相互行為によって成立したことが物象化あるいは擬人化されて、あたかもひとつの『共同主観 Mitsubjekt』『高次的人格』(フッサール, E.) であるかのように働く次元を『共同主観性』という語で呼ぶ」(浜渦, 2012, p.285) というものである。このうち本稿で意図しているのは(2)である。

昨日からなのか、先月からなのか、私たちの食卓に肉がなかったとしても関係ない。鶏肉の最も美味しく高価な部分は、この男のものである。

ああ、私は忘れかけていた。私たちと違って、その男は分けてくれないことを。

おばあちゃんが説明しているように、その男は鶏の胸肉だけを食べる。

どうでもいいけど…

その男は夕食前に硬いサラミを食べた。

またしても、その男は分けなかった。

この男が家にいるときは、別のルールがある。

私たちきょうだいはルールを学ぶ。私たちは鶏の胸肉を嫌うために学ぶ。

(Moreira, 2012, p.151-152)

このテキストでは、夕食という家族内で現れる権力やジェンダーといったイデオロギーが描かれている。このAEの著者は、こうした権力を受け入れているのではなく、抵抗するための手段としての物語(ナラティヴ)を顕在化しているのである。その素材となっているのは鶏肉を食べるというエピファニー(epiphany)である。エピファニーとは、「個人の特質を照らし出し、しばしば個人の人生における転換点を表す問題的体験の瞬間」(Denzin, 1989/1992, p158)を指す。Moreira (2012)は、このような「食べる／食べないという一つの瞬間から、私は抵抗する物語を作るように努力している」(Moreira, 2012, p.151-152)と述べている。つまり、パフォーマンスAEでは、権力や政治、社会制度に向けた批判や抵抗のためのパフォーマンスとしてAEを実践しているという側面がある。

パフォーマンスAEでは、エピファニーに焦点を当てることによって、社会や世界を変革したり、批判したり、抵抗したりしようとする。Denzin (1989/1992)は、「しばしば個人的トラブルは公的な問題へと噴出する」と述べ、研究者が「個人的諸問題や個人的トラブルを、より大きな社会的公的な問題(issue)に結び付ける」(Denzin, 1989/1992, p.14)ことの重要性を指摘している。つまり、エピファニー

は、個人的な転換点であると同時に社会的との相互作用的關係において生じる問題的経験として概念化されている。つまり、家庭内の食事における個人的経験をAEとして描くことは、社会や権威に対して抵抗・批判するためのモードであるとも考えられる。

第2象限：相互行為的オートエスノグラフィー（個別性理解×相互主観的著述）

次に、研究者が他者とともにある特定の経験を探究し、その研究プロセスにおける相互行為をもとに、ある経験を理解しようとするAEの志向がある。このような志向を、相互行為的志向と呼ぶ。

この一例として、1990年代から他者との対話やインタビューを導入したAEが行われてきた。例えば、相互行為的インタビュー(interactive interviewing; Ellis, Kiesinger, & Tilmann-Healy, 1997)は、研究者と参加者との間の共同の取り組みであり、研究者と参加者が特定のトピックについての会話の中で発生する問題について(同じものを)一緒に調査する研究活動である(Ellis et al., 2011)。例えばEllis et al. (1997)では、レストランでの夕食中の会話をもとに共同構築された、摂食障害の経験に関するナラティヴが検討されている。ここでの問題関心は、摂食障害という文化的事象というよりも2名の共著者の個別的な経験を理解することに焦点が置かれている。

同じくエリスが実施している対話的な方法として、反省的な二者間インタビュー(reflexive, dyadic interviews; Ellis, 2004; Ellis & Berger, 2002)がある。これは、インタビューの中に研究者の経験を含めていく方法である。従来のインタビューのように、研究参加者とその物語に焦点を置きながらも、研究者の言葉、思考、感情も同様に考慮し、相互行為的に生み出された諸意味と、インタビュー自体の感情的なダイナミクスに焦点を当てていく(Ellis, 2004; Ellis et al., 2011)。他者のナラティヴに研究者の経験を重ねることで、その内容や文脈の理解が容易になる。

2人の研究者が対話的にAEを記述する方法として、デュオエスノグラフィー(Norris et al., 2012; Sawyer & Norris, 2013, 2015)という方法論がある。デュオエスノグラフィーは「異なる2人またはそれ

以上の研究者が、ある世界の複数の理解を提供するために、彼らの生活史を並置させる、1つの協同的な研究方法論」(Norris et al., 2012, p.9) と定義される。その背景には、Pinar (1975) によるクレレ (currere) の概念がある。クレレとは、カリキュラム研究の文脈において、カリキュラムを教師・外部から一方的に与えられるもの(「競争路」の意としてのラテン語の "curriculum") ではなく、学習者の個人誌 (autobiography) と捉える (すなわち、"currere" (走る) という原意に戻す) ことを提案したものである (浅沼, 2003; 溝上, 2006)。そのため、デュオエスノグラフィーでは「異なる個人の生活史が、諸経験に与える意味にどのように影響をするかを探ること」(Sawyer & Norris, 2015, p.2) を目的としている。また、この方法論においては、2人 (以上) の著者がそれぞれの個人誌の差異に目を向け、それぞれの視点から物語を並置していくという方法論的特徴がある。デュオエスノグラフィーは、物語を一意に意味づけしたり、解釈したりしないことで読者自身が物語に対する新しい意味づけを生み出したり、価値観の多様性に気付く契機となる可能性を秘めている。

さらに、最近では、以下のような対話を通じた実践が行われている。これらも上記の AE と類する志向を持つといえる。福島 (2011) は、視覚・聴覚の喪失と指字を用いたコミュニケーションの再構築過程を記述・分析した。その取り組みの中で、盲ろう者としての自己について、認識上「時間的に分節化」(福島, 2011, p.33) した記述・分析を行った。さらに、そうして分節化された「私」の統一体を、「位相的分節化」(内部と外部の視点に分節) (p.33) して把握するために、「他者媒介型自己回帰インタビュー」(p.33) という手法を生み出している。この研究方法は、自己内対話による相互行為的分析の手法として位置づけることができる。なお、福島 (2011) の著作『盲ろう者として生きて—指字によるコミュニケーションの復活と再生』の中には、手記、記憶、音声記録などを多元的に用いた「熟慮的」な志向での AE も含まれている。

沖潮 (2013) による対話的な自己エスノグラフィは、自身が、障害を抱える妹との関係性について対

話者に耳を傾けてもらい、時には軌道修正もしてもらいながら語るための方法として提案したものである。これは「対話者という媒介を通して研究者が自分自身を捉え、記述していく試み」(沖潮, 2013, p.173) である。この方法は、「あくまでも筆者自身の体験に迫っていくことを中心」(p.163) としたものだという点で、個別的な理解を志向している。この方法論には、他者との対話ややりとりを通して、これまでの AE に対する批判に 대응することができるだけでなく「対話者からの疑問や問題提起、感想などによって自然に自己を客観視し、新たな自分への気づきが生まれやすくなり、より自己探究を深めることが期待できる」(沖潮, 2013, p.169) という利点がある。

以上のような相互行為的志向では、研究者の経験を題材としながらも、他者を通して (他者と語りや協同構築したり、対話したり、他者の物語を理解したりすることで) その経験を新たに意味づけようとする。AE の方法として対話やインタビューを用いることによって、特定の経験をこれまでと異なる側面から見ることができたり、自己の経験を相対化して理解できるようになると考えられる。

第3象限：エスノグラフィー的オートエスノグラフィ (他者・共通性理解×相互主観的著述)

この志向に相当する AE には、現在では当事者の AE と協同的 AE という、2つのアプローチがある。

完全なる成員によるオートエスノグラフィ

第1に、分析的 AE と組織的 AE (organizational autoethnography) という2つの方法は、研究者がある文化的行為に関わる当事者ないし内部者である場合に、そこで出会う人びとと共に経験に対する理解を深めていく点が類似している。この志向でしばしば強調されるのは、分析的 AE でも強調される「完全なる成員としての研究者」(Adler & Adler, 1987; Anderson, 2006a) としての特徴である。AE の研究者がある集団の一員である場合に、この志向で研究がなされることがある (例えば、Hayano (1982) によるポーカー・ルームの研究)。

あるいは、エスノグラフィーにおける研究者が、研究プロセスを通して、回心 (convert) して成員

と同一化することで AE 的な記述になることもある (Ellis & Bochner, 2000/2006)。つまり、ある現場にてフィールドワークを開始した研究者が、現場の人びととのコミュニケーションを通して、その人びとと特定の視点を共有できるようになるということである。例えば、文化人類学者の Rosaldo は、首狩り族 (イロンゴットの人たち) のフィールドワーク中において、妻の死という重要な転機 (エピファニー) を通して、首狩り族の怒りの意味を情動的に理解できるようになった (Denzin, 1989/1992; Rosaldo, 1989/1998)。このように、当事者の AE では、ある特定のグループの人びとと共に、内部者としての視点や、感情・感覚といった次元を扱うことができる。

協同的オートエスノグラフィー

第 2 に、複数の研究者が協同で、特定のテーマを探究するために、各々の個人的経験の記述がなされることがある。この志向の利点は、類似する文化的事象に対して多様な解釈を提供できることである。例えば、Cohen, Duberley, & Musson (2009) は、仕事と日常生活の関係について、オートエスノグラフィックな会話 (autoethnographic conversation) を用いた研究を行っている。ここでは、著者らがメールや会話に基づいてオートエスノグラフィーを記述している。Cohen et al. (2009) によるアプローチは、相互行為的志向と同様に、研究者同士の相互作用を前提としているものの、その問題関心としては仕事と日常関係との関係を理解することにある。

Chang et al. (2013) では、AE は基本的に研究者単独 (solo) で行うものとした上で、協同的 AE を提案している。この独自の利点には「自叙伝に伴う自己反省性、エスノグラフィーに伴う文化的解釈、コラボレーションに伴う多主観性 (multi-subjectivity)」(Chang et al., 2013) の 3 点があると整理している。Chang et al. (2013) は、複数人で取り組む AE 全般を協同的 AE と呼んでおり、その中には相互行為的 AE で前述したデュオエスノグラフィーも含まれる。しかし Chang et al. (2013) の方法論は、あるテーマを探究するために複数人の研究者が協同で行う AE を想定している一方で、デュオエスノグラフィーでは研究者の個人史により関心があるという点で区

別される。つまり、両者のアプローチは、いずれも複数人で取り組む AE ではあるが、方法論的志向は異なっている。

第 4 象限：熟慮的オートエスノグラフィー (他者・共通性理解×主観的著述)

近年の AE 実践において、主観的経験の精緻な理解を通して、他者や心理的プロセスの共通性を理解しようとする志向がある。こうした志向を熟慮的志向と呼ぶ。この志向の AE に関する方法論的な議論は十分ではないが、いくつかの研究が位置づけられる。

例えば、五十嵐 (2019) による AE では、出版という能動性が支配する編集職を離れ、「マンアワーコスト (1 時間あたりに労働者が行う作業に対する費用)」という企業原理が支配する印刷会社に就職した後の経験が描かれている (五十嵐, 2019)。五十嵐は、その転職経験においてどのように「自分が自分であるという感覚」(五十嵐, 2019, p.259) が失われ、それを取り戻したか (自己のまとめ上げ) について、自身のメモ記録をもとに AE を記述している。AE を通して、五十嵐 (2019) は、自己のまとめ上げにかかわる二つの〈存在の原感覚〉——自分のまとまりの感覚と、その欠損の感覚——の対抗と葛藤を取り出した。これらの原感覚は、転職という具体的な経験に由来しているものの、その経験の創出過程の精緻な分析・記述や理論的な分析により導かれている。ここで重要な点は、〈存在の原感覚〉という抽象的な概念が、その創出過程の具体的な記述を通して、他者にも理解・転用可能なものとなっている点である。このような理論を介した自己との対話が、結果的に他者の経験との共通性を見いだすことに繋がる場合もある。

土元・小田・サトウ (2020) では、キャリアの転機における「成長の瞬間」(心理的移行を終え、新たな生活が始まる瞬間) を促した他者との関係性を明らかにした。この関係性を「よいキャリア支援」と名づけ、そこで経験された身体感覚 (フェルトセンス) を言語化する AE を行った。そのための方法として、TAE ステップ (Gendlin, 2004/2004) および、メタファーの生成が用いられた。この研究過程を通

して、第1著者である土元の主観的な「よいキャリア支援」理論だけでなく、その理論を他者に理解可能なものとするための「卓球ラリーメタファー」⁹⁾が生成された。ここで、土元ら（2020）は、「よいキャリア支援」についての主観的な身体感覚を言語化するだけでなく、メタファーという手段を用いて、身体経験に基づきながら、他者と協同的にキャリア支援のあり方を考えていくためのモデル生成を行っている。なお、TAEステップの実践にあたり、研究協力者である第2著者は、相互行為的に意味を生成するというよりも、TAEステップの手順の解説や意味の深化を促すガイドとしての役割を担った。

以上の研究では、主観的に重要な経験の創出過程の精緻な記述（自叙伝的志向でも重視されている）を通して、他者にも共通に生じる心理過程の理解や、他者に同様の経験を創出する可能性を考察することが目指されている。このような志向を本稿では「熟慮的（deliberate）」と表現したが、この用語は、Zittoun（2016）に着想を得たものである。deliberateという語には、「慎重に考慮された」「十分な自覚または意識を持ってなされた」といった意味がある（Oxford University Press, 2020）。Zittoun（2016）は、想像（イマジネーション）を研究する方法を「視点」（一人称的、三人称的、間主観的）と「反省」（直接的、内省的、熟慮的）の次元を用いて紹介する中で熟慮的という語を用いている。想像を一人称的に研究する際、熟慮的な反省とは、「（想像の）経験を創出することができる資源やきっかけを探る」（p.10）という視点であるという。そのような反省によって、人は意図的に想像のきっかけを操作したり、資源を用いたり、想像の持つ目的や結果、それらの実現（realization）を方向づけたりできる（Zittoun, 2016）。

Ⅲ. 結論と展望

本論文は、AEにおける2つの主流の方法論である喚起的AEと分析的AEの方法論を整理したうえで、現在のAEの方法論的志向について新たに整理したものである。最後に、AE研究の展望として、著述と研究技法の観点から、AEにおける方法論的議論の可能性を検討する。

まず、現代のエスノグラフィーや喚起的AEでは、「探究の方法としての著述（writing as a method of inquiry）」（Richardson, 2000/2006）という側面を重視している。これは、単純に言えば、私たちは著述によって新しい発見や、洞察を得ることができるということを指す。これには2つの側面がある。第1に、「書く」という営みは、私たちが「結果」として見出した現実や考え方を「そのままに」表現・伝達するものではないということである。むしろ、「書くこと」は現象を理解していく過程であり、はじめに考えた内容も、表現を改め、新しい言葉を見つけていくうちに変容していくという側面がある。第2に、「書き方」（フォーマットや慣習、メタファーなどを含む）が変われば、現実に対する新しい側面の発見が可能になるということである（Richardson, 2000/2006）。

このように、著述を過程としてとらえ、また、探究の方法として重視するのであれば、喚起的AEだけではなく全てのAEにとって、どのような著述形式を採用するかは重要な問題となる。なぜなら、ある著述形式には、そこで用いることができることばや文体、典型的な表現、対象とする読者、コミュニティにおける規範などが埋め込まれており、それが書き手の思考を制約ないし促進することがあるからである。例えば、喚起的AEの論者は「目的、方法、結果、考察」といった科学的な著述形式を批判している。こうした形式は、私たちが実際に生きている日常生活で用いられることばや経験の理解の様式から、かけ離れていると考えるからである。その代わりに、AEや現代エスノグラフィーでは小説、詩、絵画、映像といった生活の文脈に近い様式で経験を語ることによって、人々の生きられた経験を理解するための著述様式を探求しているのである。この点は、AE研究者だけでなく、社会科学の研究者も向

9) 卓球ラリーのメタファーとは、土元ら（2020）が構築した「よいキャリア支援」をもとに、読み手の洞察を深めたり、理解を深化させるために生成されたものである。ここでは、卓球ラリーのいくつかの側面（例：ボール、選手、ラリーを続けること）が「よいキャリア支援理論」の側面（例：夢、支援者・被支援者、他者の夢との繋がり）と結びつけられるとともに、キャリア論やナラティブ論との理論的な接合が試みられている。

き合っていくべき課題である。

近年では、AEの方法として、対話的な自己エスノグラフィ（沖潮，2013；町田，2018），複線径路等至性モデリング（土元，2020），エピソード記述（佐藤，2011；鈴木，2018），他者媒介型自己回帰インタビュー（福島，2011），TAEステップ（土元ら，2020），プロセスレコード（大河内，2017）といった質的研究法が用いられることがある。もちろん，これらの質的研究法には，特定の理論や認識論的背景が含まれているため，形式的に取り入れてAEを実践すればよいということにはならない。質的研究法は，人々の生活経験を厚く記述し，理解しようとする点でAEと共鳴する部分も多い。ただし，いずれかの質的研究法を選ぶことは著述様式を決定することでもあり，質的研究法による経験の記述は，AE研究にとって著述のプロセスの一部であるといえる。したがって，特定の質的研究法を用いたことで，どのようなプロセスで自己理解が変化・深化したのか，それらの方法が暗に影響を受けている認識論や規範などについて，方法論的な省察が求められる。

本研究の意義は，AEにおける方法論を議論の俎上に載せたことにある。これまでAEは「喚起的か分析的か」という1次元のスペクトラムとして捉えられてきたが，そこでは“小説や詩のような文学的・芸術的な形式が喚起的AEであり，科学的・客観的な著述が分析的AEである”といったように，AEの作品（著述の成果物）が採用する様式の特徴が強調されてきた。したがって，これまでのAEの議論においては，様々なAEの方法論の特徴を議論するための枠組みが十分に議論されてこなかった。

本稿で新たに提案したAEの4つの志向が自叙伝的志向，相互行為的志向，エスノグラフィ的志向，熟慮的志向である。これらの類型は，特に物語の〈著述〉（主観的－相互主観的）と自己・文化理解を目指す〈姿勢〉（個別性理解－他者・共通性理解）という2つの軸によって特徴づけられる。この4つの類型と2つの軸は，AEの方法論を議論したり，評価するための枠組みとしても有用であると考えられる。一方で，AEを類型化することで，これらの類型に当てはまらない実践に取り組みづらくなるような可能性も考えられるが，それは本稿が意図すると

ころではない。この類型は，経験の当事者でなければAEを実践し難いという状況を乗り越える一つの糸口として，方法論という視点から新たなAEの要件を明示しようとするものである。したがって，必ずしもこの志向に含まれないAEや，複数の象限に重なるようなAEもあるだろう。さらに，それぞれの方法論的志向を組み合わせることはできるのか，どのように組み合わせることが効果的なのかといった点についても，今後AE研究が広がる中で検討する余地がある。

引用文献

- Adams, T. E., & Herrmann, A. (2020). Expanding Our Autoethnographic Future. *Journal of Autoethnography*, 1 (1), 1-8.
- Adler, P. A., & Adler, P. (1987) *Membership Roles in Field Research*. SAGE.
- Allen-Collinson, J. (2013) Autoethnography as the Engagement of Self/Other, Self/Culture, Self/Politics, and Selves/Futures. In *Handbook of Autoethnography* (pp. 281-299). Left Coast Press.
- Anderson, L. (2006a) Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35 (4), 373-395.
- Anderson, L. (2006b) On Apples, Oranges, and Autopsies: A Response to Commentators. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35 (4), 450-465.
- 浅沼茂 (2003) カリキュラム研究におけるナラティブスタディの方略 (I). 東京学芸大学紀要第1部門, 54, 1-10.
- バンクス, M. (2016) 質的研究におけるビジュアルデータの使用 (黒広昭, 訳). 新曜社. (Banks, M. (2007) *Using visual data in qualitative Research*. SAGE.)
- Bochner, A., & Ellis, C. (2016) *Evocative autoethnography: Writing lives and telling stories*. Routledge.
- Bruner, J. S. (1990) *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.
- Chang, H. (2008) *Autoethnography as Method*. Routledge.
- Chang, H., Ngunjiri, F., & Hernandez, K.-A. C. (2013) *Collaborative autoethnography*. Routledge.
- Cohen, L., Duberley, J., & Musson, G. (2009) Work-life balance?: An autoethnographic exploration of everyday home-work dynamics. *Journal of Management Inquiry*, 18 (3), 229-241. <https://doi.org/10.1177/1056492609332316>
- デンジン, N. K. (1992) エビファニーの社会学—解釈的相互作用論の核心—(関西現象学的社会学研究会, 編訳). マグロウヒル. (Denzin, N. K. (1989) *Interpretive Interactionism*. SAGE.)

- Denzin, N. K. (2006) Analytic Autoethnography, or Déjà Vu all Over Again. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35 (4), 419-428.
- Denzin, N. K. (2018) *Performance autoethnography: Critical pedagogy and the politics of culture*. Routledge.
- デンジン, N. K.・リンカン, Y. S. (編) (2006) 質的研究の学問と実践 (平山満義, 訳). デンジン, N. K.・リンカン, Y. S. (編) 質的研究ハンドブック 第1巻 (平山満義, 監訳). (2nd ed., pp. 1-28). 北大路書房.
- (Denzin, N. K., & Lincoln, Y. S. (2000) Introduction: The Discipline and Practice of Qualitative Research. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed.). SAGE.)
- Ellis, C. (2004) *The Ethnographic I: A Methodological Novel about Autoethnography*. Rowman Altamira.
- Ellis, C., Adams, T. E., & Bochner, A. P. (2011) Autoethnography: An Overview. *Historical Social Research/Historische Sozialforschung*, 36 (4), 273-290.
- Ellis, C., & Berger, L. (2002) Their Story/My Story/Our Story: Including the Researcher's Experience in Interview Research. In J. Gubrium & J. Holstein (Eds.), *Handbook of Interview Research: Context and Method* (pp. 849-875). SAGE.
- エリス, C.・ボクナー, A. P. (2006) 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性—研究対象としての研究者— (藤原顕, 訳). デンジン, N. K.・リンカン, Y. S. (編) 質的研究ハンドブック 第3巻 (平山満義, 監訳). (2nd ed., pp. 129-164). 北大路書房.
- (Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000) Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed., pp. 733-768). SAGE.)
- Ellis, C., Kiesinger, C., & Tilmann-Healy, L. M. (1997) Interactive interviewing: Talking about emotional experience. In R. Hertz (Ed.), *Reflexivity and voice* (pp. 119-149). SAGE.
- Frank, A. W. (1995) *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*. University of Chicago Press.
- 福島智 (2011) 盲ろう者として生きて—指点字によるコミュニケーションの復活と再生—. 明石出版.
- ジェンドリン, E. T. (2004) 「TAE (辺縁で考える)」への序文 (村里忠之・村川治彦, 訳). (Gendlin, E. T. (2004) Introduction to "Thinking At the Edge". *The Folio*, 19, 1-8.
- 浜渦辰二 (2012) 共同主観性. 見田宗介 (編) 現代社会学辞典 (p. 285). 弘文堂.
- Hayano, D. M. (1982) *Poker faces: The life and work of professional card players*. University of California Press.
- 東村知子 (2018) 実証主義. 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦 (編) 質的心理学辞典 (pp. 133-134). 新曜社.
- Holman Jones, S., Adams, T., & Ellis, C. (2013) *Handbook of Autoethnography*. Left Coast Press.
- 五十嵐茂 (2019) 自己エスノグラフィにおける意味の文脈—ある転職体験—. 質的心理学研究, No.18, 242-262.
- 井本由紀. (2013) オートエスノグラフィー. 藤田結子・北村文 (編) ワードマップ 現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践— (pp. 104-111). 新曜社.
- 前田泰樹 (2007) はじめに. 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 (編) ワードマップ エスノメソドロロジー—人びとの実践から学ぶ— (pp. iii-xii). 新曜社.
- 町田奈緒士 (2018) 関係の中で立ち上がる性—トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討—. 人間・環境学, No.27, 17-33.
- 溝上慎一 (2006) カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点—アクティブ・ラーニングの検討に向けて—. 京都大学高等教育研究, 12, 153-162.
- Moreira, C. (2012) I hate chicken breast: a tale of resisting stories and disembodied knowledge construction. *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 25 (2), 151-167.
- マーフィー, R. F. (2006) ボディ・サイレント (辻信一, 訳). 平凡社. (Murphy, R. F. (1987) *The Body Silent: The Different World of the Disabled*. WW Norton & Company.)
- 中島裕昭・花家彩子 (2012) 上演芸術の経験を分析するための方法—花家彩子によるオートエスノグラフィー—. 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 64, 37-45.
- Norris, J., Sawyer, R. D., & Lund, D. (2012) *Duoethnography: Dialogic methods for social, health, and educational research*. Left Coast Press.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2013) 対話的な自己エスノグラフィー語り合いを通じた新たな質的研究の試み—. 質的心理学研究, No.12, 157-175.
- 大河内敦子 (2017) 看護系大学での精神看護学実習担当教員の活動における教育的意義の探索—オートエスノグラフィーを用いる試み—. 明星大学 通信制大学院研究紀要 教育学研究, 16, 39-47.
- Oxford University Press (2014) ethnography. In *Oxford English Dictionary*. Retrieved January 31, 2020, from <https://www.oed.com/view/Entry/64809>
- Oxford University Press (2020) deliberate. In *Oxford English Dictionary*. Retrieved January 31, 2020, from <https://www.oed.com/view/Entry/49345>
- Pelias, R. J. (2004) *A methodology of the heart: Evoking academic and daily life*. Rowman Altamira.
- Pinar, W. F. (1975) The Method of Currere. *The Annual Meeting of the American Educational Research Association*.

- プラサド, P. (2018) 技としての質的研究—ポスト実証主義の諸系譜と研究スタイル— (町恵理子, 訳). 質的研究のための理論入門—ポスト実証主義の諸系譜— (pp. 1-15). ナカニシヤ出版. (Prasad, P. (2005) *Qualitative Research as Craft: Postpositivist Traditions and Research Styles*. In *Crafting qualitative research: Working in the positivist traditions* (pp. 1-11). Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe.)
- リチャードソン, L. (2006) 書く—ひとつの探求方法— (徳川直人, 訳). デンジン, N. K.・リンカン, Y. S. (編) 質的研究ハンドブック 第3巻 (平山満義, 監訳). (2nd ed., pp. 315-342). 北大路書房. (Richardson, L. (2000) *Writing: A Method of Inquiry*. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed., pp. 923-948). SAGE.)
- ロサルド, R. (1998) 文化と真実—社会分析の再構築— (椎名美智, 訳). 日本エディタースクール出版部. (Rosaldo, R. (1989) *Culture & truth: the remaking of social analysis: with a new introduction*. Beacon Press.)
- 佐藤智恵 (2011) 自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析—「語られなかった」保育を枠組みとして—. *保育学研究*, 49 (1), 40-50.
- Sawyer, R. D., & Norris, J. (2013) *Duoethnography*. Oxford University Press.
- Sawyer, R. D., & Norris, J. (2015) Duoethnography: A Retrospective 10 Years After. *International Review of Qualitative Research*, 8 (1), 1-4.
- シュワント, T. A. (2009) 質的研究用語辞典 (伊東勇・徳川直人・内田健, 監訳). 北大路書房. (Schwandt, T. A. (2007) *The SAGE Dictionary of Qualitative Inquiry* (3rd Ed.) SAGE.)
- 鈴木一成 (2018) 語られなかった体育の「主体的な学び」の検討—自己エスノグラフィーを参考にして—. *愛知教育大学研究報告*. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 67 (2), 35-40.
- Tedlock, B. (2013) Braiding Evocative with Analytic Autoethnography. In *Handbook of Autoethnography* (pp. 358-362). Left Coast Press.
- 土元哲平 (2020) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 立命館大学大学院文学研究科博士論文. (未刊行)
- 土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ (2020) 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚—TAEステップを用いた理論構築—. *質的心理学研究*, 19, 46-67.
- Wall, S. S. (2016) Toward a moderate autoethnography. *International Journal of Qualitative Methods*, 15 (1), 1-9.
- Zittoun, T. (2016) Studying Higher Mental Functions: The Example of Imagination. In J. Valsiner, G. Marsico, N. Chaudhary, T. Sato, & V. Dazzani (Eds.), *Psychology as the Science of Human Being: The Yokohama Manifesto* (pp. 129-147). Springer.

資料

海外オートエスノグラフィー関連文献 (本稿にてレビューしたもの)

- Adams, T. E., & Holman Jones, S. (2011). Telling stories: Reflexivity, queer theory, and autoethnography. *Cultural Studies - Critical Methodologies*, 11 (2), 108-116. <https://doi.org/10.1177/1532708611401329>
- Adams, T. E., Holman Jones, S., & Ellis, C. (2015). *Autoethnography*. Oxford University Press.
- Adler, P. A., & Adler, P. (1987). *Membership Roles in Field Research*. SAGE.
- Adler, P. A., Adler, P., & Fontana, A. (1987). Everyday Life Sociology. *Annual Review of Sociology*, 13, 217-235. <https://doi.org/https://doi.org/10.1146/annurev.so.13.080187.001245>
- Anderson, L. (2006). Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35 (4), 373-395. <https://doi.org/10.1177/0891241605280449>
- Behar, R. (1996). *The Vulnerable Observer: Anthropology that Breaks Your Heart*. Beacon Press.
- Binnix, T. M., Rambo, C., Abrutyn, S., & Mueller, A. S. (2018). The Dialectics of Stigma, Silence, and Misunderstanding in Suicidality Survival Narratives. *Deviant Behavior*, 39 (8), 1095-1106. <https://doi.org/10.1080/01639625.2017.1399753>
- Bochner, A., & Ellis, C. (2016). *Evocative autoethnography: Writing lives and telling stories*. Routledge.
- Bochner, A. P. (1994). Perspectives on Inquiry II: Theories and Stories. In M. L. Gerold & K. R. Miller (Eds.), *Handbook of Interpersonal Communication* (2nd Ed., pp. 21-41). SAGE.
- Bochner, A. P. (1997). It's About Time: Narrative and the Divided Self. *Qualitative Inquiry*, 3 (4), 418-438.
- Brandes, S. (1979). Ethnographic Autobiographies in American Anthropology. *Central Issues in Anthropology*, 1 (2), 1-17. <https://doi.org/10.1525/cia.1979.1.2.1>
- Bruner, E. M. (1986). Ethnography As Narrative. In *The Anthropology of experience* (pp. 139-155).
- Butler, S. (2009). Considering "Objective" Possibilities in Autoethnography: A Critique of Heewon Chang's Autoethnography as Method. *Qualitative Report*, 15 (1), 295-299.
- Cohen, L., Duberley, J., & Musson, G. (2009). Work-life

- balance?: An autoethnographic exploration of everyday home-work dynamics. *Journal of Management Inquiry*, 18 (3), 229-241. <https://doi.org/10.1177/1056492609332316>
- Coia, L., & Taylor, M. (2009). Co/autoethnography: Exploring Our Teaching Selves Collaboratively. *Research Methods for the Self-Study of Practice*, 9, 3-16. <https://doi.org/10.1007/978-1-4020-9514-6>
- Custer, D. (2014). Autoethnography as a transformative research method. *The Qualitative Report*, 19 (2013), 1-13. <https://doi.org/10.1177/1359104514550556>
- Deck, A. A. (1990). Autoethnography: Zora Neale Hurston, Noni Jabavu, and Cross-Disciplinary Discourse. *Black American Literature Forum*, 24 (2), 237-256.
- Denzin, N. K. (1989). *Interpretive Biography*. SAGE.
- Ellis, C. (1991). Sociological Introspection and Emotional Experience. *Symbolic Interaction*, 14 (1), 23-50. <https://doi.org/10.1525/si.1991.14.1.23>
- Ellis, C. (1999). Heartful autoethnography. *Qualitative Health Research*, 9 (5), 669-683. <https://doi.org/10.1177/104973299129122153>
- Ellis, C. (2004). *The Ethnographic I: A Methodological Novel about Autoethnography*. Rowman Altamira.
- Ellis, C. (2007). Telling Secrets, Revealing Lives: Relational Ethics in Research with Intimate Others. *Qualitative Inquiry*, 13 (1), 3-29. <https://doi.org/10.4324/9780203760352-10>
- Ellis, C., Adams, T. E., & Bochner, A. P. (2011). Autoethnography: an Overview. *Historical Social Research/Historische Sozialforschung*, 36 (4), 273-290. <https://doi.org/https://doi.org/10.12759/hsr.36.2011.4.273-290>
- Ellis, C., & Berger, L. (2002). Their Story/My Story/Our Story: Including the Researcher's Experience in Interview Research. In J. Gubrium & J. Holstein (Eds.), *Handbook of Interview Research: Context and Method* (pp. 849-875). SAGE.
- Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed., pp. 733-768). SAGE.
- エリス, C.・ボクナー, A. P.(2006). 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性—研究対象としての研究者— (藤原顕, 訳). デンジン N. K. & リンカン Y. S. (編), 質的研究ハンドブック 第3巻 (平山満義, 監訳) (2nd ed., pp. 129-164). 北大路書房.(Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed., pp. 733-768). SAGE.)
- Ellis, C., Bochner, A. P., Rambo, C., Berry, K., Shakespeare, H., Gingrich-Philbrook, C., Adams, T. E., Rinehart, R. E., & Bolen, D. M. (2018). Coming Unhinged: A Twice-Told Multivoiced Autoethnography. *Qualitative Inquiry*, 24 (2), 119-133. <https://doi.org/10.1177/1077800416684874>
- Ellis, C., Kiesinger, C., & Tillmann-Healy, L. M. (1997). Interactive interviewing: Talking about emotional experience. In R. Hertz (Ed.), *Reflexivity and Voice* (pp. 119-149). SAGE.
- Goldschmidt, W. (1977). Anthropology and the Coming Crisis: An Autoethnographic Appraisal. *American Anthropologist*, 79 (2), 293-308.
- Hayano, D. M. (1979). Auto-Ethnography: Paradigms, Problems, and Prospects. *Journal of Anthropological Research*, 38 (1), 99-104.
- Hayano, D. M. (1982). *Poker faces: The life and work of professional card players*. Univ of California Press.
- Heider, K. G. (1975). What Do People Do? Dani Auto-Ethnography. *Journal of Anthropological Research*, 31 (1), 3-17. <https://doi.org/10.1097/00003081-198023030-00001>
- Hoppes, S. (2005). When a child dies the world should stop spinning: An autoethnography exploring the impact of family loss on occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 59 (1), 78-87. <https://doi.org/10.5014/ajot.59.1.78>
- Hoppes, S. (2014). Autoethnography: Inquiry Into Identity. In *NEW DIRECTIONS FOR HIGHER EDUCATION* (Vol. 166, pp. 63-71). Wiley Online Library. <https://doi.org/10.1002/he>
- Loren, D., & Rambo, C. (2019). "God Smites You!": Atheists' Experiences of Stigma, Identity Politics, and Queerness*. *Deviant Behavior*, 40 (4), 445-460. <https://doi.org/10.1080/01639625.2018.1431039>
- Mehan, H., & Wood, H. (1975). An Image of Man for Ethnomethodology. *Philosophy of the Social Sciences*, 5 (3), 365-376. <https://doi.org/10.1177/004839317500500301>
- Neville-Jan, A. (2003). Encounters in a world of pain: An autoethnography. *American Journal of Occupational Therapy*, 57 (1), 88-98. <https://doi.org/10.5014/ajot.57.1.88>
- Ohnuki-Tierney, E. (1984). "Native" anthropologists. *American Ethnologist*, 11 (3), 584-586. <https://doi.org/10.1525/ae.1984.11.3.02a00110>
- Phuong, L. T. B., Khang, D. N., Preston, T. R., & Leng, R. A. (2012). Mitigating methane emissions from ruminants; comparison of three nitrate salts as sources of NPN (and sinks for hydrogen) in an in vitro system using molasses and cassava leaf meal

- as substrates. *Livestock Research for Rural Development*, 24 (1), 17.
- Rambo, C. (2005). Impressions of grandmother: An autoethnographic portrait. *Journal of Contemporary Ethnography*, 34 (5), 560–585. <https://doi.org/10.1177/0891241605279079>
- Reed-Danahay, D. (1997). Introduction. In D. Reed-Danahay (Ed.), *Auto/ethnography: rewriting the self and the social* (pp. 1–17). Oxford and New York: Berg Publishers.
- Richardson, L. (2000). New writing practices in qualitative research. In *Sociology of Sport Journal* (Vol. 17, pp. 5–20). <https://doi.org/10.1123/ssj.17.1.5>
- Ronai, C. R. (1992). The Reflexive Self Through Narrative: A Night in the Life of an Exotic Dancer/Researcher. In C. Ellis & M. G. Flaherty (Eds.), *Investigating Subjectivity: Research on Lived Experience* (pp. 102–124). A SAGE FOCUS EDITION.
- Ronai, C. R. (1995). Multiple Reflections of Child Sex Abuse: An Argument for a Layered Account. *Journal of Contemporary Ethnography*, 23 (4), 395–426. <https://doi.org/10.1177/089124195023004001>
- Ronai, C. R. (1998). Sketching with Derrida: An ethnography of a researcher/erotic dancer. *Qualitative Inquiry*, 4 (3), 405–420. <https://doi.org/10.1177/107780049800400306>
- Sikes, P. (2015). Book Review: Stacy Holman Jones, Tony E. Adams and Carolyn Ellis (eds), *Handbook of Autoethnography*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press, 2013. 736 pp. ISBN: 9781598746006 (hbk) £105.00. *Qualitative Research*, 15 (3), 413–416. <https://doi.org/10.1177/1468794114535048>
- Sparkes, A. (2000). Autoethnography and Narratives of Self: Reflections on Criteria in Action. *Sociology of Sport Journal*, 17, 21–43.
- Tangene, C. (2017). The “Silence” of the Ocean: Affective Self-Dialogue on a Sailing Night-Shift. In O. V. Lehmann & J. Valsiner (Eds.), *Deep Experiencing: Dialogues within the self* (pp. 39–50). Springer.
- Tedlock, B. (1991). From Participant Observation to the Observation of Participation. *Journal of Anthropological Research*, 47 (1), 69–94.
- Toyosaki, S., Pensoneau-Conway, S. L., Wendt, N. A., & Leathers, K. (2009). Community autoethnography: Compiling the personal and resituating whiteness. *Cultural Studies - Critical Methodologies*, 9 (1), 56–83. <https://doi.org/10.1177/1532708608321498>
- ヴァン＝マーネン J. (1999). フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法— (森川渉, 訳). 現代書館. (Van-Maanan, J. (1988). *Tales from the Field: On Writing Ethnography*. University of Chicago press.).
- Wall, S. (2006). An Autoethnography on Learning About Autoethnography. *International Journal of Qualitative Methods*, 5 (2), 146–160. <https://doi.org/10.1177/160940690600500205>
- Wall, S. (2008). Easier Said than Done: Writing an Autoethnography. *International Journal of Qualitative Methods*, 7 (1), 38–53. <https://doi.org/10.1177/160940690800700103>
- Wall, S. S. (2016). Toward a moderate autoethnography. *International Journal of Qualitative Methods*, 15 (1), 1–9. <https://doi.org/10.1177/1609406916674966>
- Wolcott, H. F. (2004). The Ethnographic Autobiography. *Auto/Biography*, 12 (2), 93–106. <https://doi.org/10.1191/0967550704ab0040a>

日本におけるオートエスノグラフィー関連文献 (本稿にてレビューしたもの)

- 福島智. (2011). 盲ろう者として生きて—指点字によるコミュニケーションの復活と再生—. 明石出版.
- 藤田紀勝・高山雅彦. (2015). 「職業訓練の世界」を「アカデミックな世界」に接続する. 職業能力開発研究誌, 31 (1), 22–31.
- 蒲生涼太. (2015). 教育研究者と学校現場の関わり方についての省察的検討—学校改革における「役割」に注目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 61, 11–23.
- 旗康之. (2019). 裁量性のマネジメントによる職場風土の変容—病院事務部の組織エスノグラフィー—. 現代社会文化研究, 68, 31–48.
- 林桂生. (2018). 勤労中高年 ASD 者のオートエスノグラフィー. 大阪大学言語文化学, 27, 27–39. <https://doi.org/10.18910/71224>
- 林桂生. (2019). 生きづらさのオートエスノグラフィー—性別違和を伴う勤労中高年 ASD (自閉症スペクトラム障害) 者—. 大阪大学言語文化学, 28, 15–27. <https://doi.org/10.18910/72855>
- 五十嵐茂. (2019). 自己エスノグラフィにおける意味の文脈—ある転職体験—. 質的心理学研究, 18, 242–262.
- 石田喜美. (2015). アーカイブづくりの活動における境界のデザイン—水戸芸術館現代美術センター高校生ウィーク「アーカイ部」を事例として—. 質的心理学フォーラム, 7, 36–47.
- 伊藤精男. (2015). 人材育成研究における「自己エスノグラフィー」の可能性. 経営学論集, 25 (4), 25–43.
- 桂悠介・千葉泉. (2021). 人間科学における「喚起的」記述の意義と課題—オートエスノグラフィー, 「自分綴り」の実践から—. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 47, 185–203. <https://doi.org/10.18910/79075>
- 桂悠介・佐々木美和・八木景之. (2021). 「協同翻訳」か

- ら始まる共生／共創—上辺だけでない議論と実践のために—(フォーラム 共生／共創の多角的検討—2). 未来共創, 8, 177-207. https://doi.org/10.50829/miraiyoso.8.0_177
- 川田千恵子・増田靖・楠本利行. (2015). マシンビジョン・ベンチャー企業間の協業に関する実践的定性研究—起業家のアイデンティティの視座から—. 政策科学学会年報, 5, 47-62.
- 河田純一・坂場優・富澤明久・福井敬・宮澤寛幸・弓山達也・渡邊龍彦. (2018). 路上生活者支援の宗教性・価値・共同性: ボランティアはなぜお寺でおにぎりを握るのか. 宗教と社会貢献, 8 (2), 1-33. <https://doi.org/10.18910/70598>
- 近藤百玲. (2016). 主体的問題解決のための思考過程の解明の試み. 教育論叢, 59, 19-34.
- 町田奈緒士. (2018). 関係の中で立ち上がる性—トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討—. 人間・環境学, 27, 17-33.
- 松田博幸. (2010). ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を学ぶことができるのか?—自己エスノグラフィーの試み—. 社会問題研究, 59, 31-42.
- 中島裕昭・花家彩子. (2012). 上演芸術の経験を分析するための方法—花家彩子によるオートエスノグラフィー—. 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 64, 37-45.
- 成田喜一郎. (2012). 次世代型学校組織マネジメント理論の構築方法—「水の思想・川の組織論の創生過程」—. 東京学芸大学教職大学院年報, 1, 1-12.
- 野田美樹. (2010). 運動する意欲を育てる保育の探求—幼児の心が動く場面を手がかりに—. 愛知教育大学幼児教育研究, 15, 57-64.
- 岡田たつみ・中坪史典. (2008). 幼児理解のプロセス—同僚保育者がもたらす情報に注目して—. 保育学研究, 46 (2), 169-178.
- 沖潮(原田)満里子. (2013). 対話的な自己エスノグラフィー—語り合いを通じた新たな質的研究の試み—. 質的心理学研究, 12, 157-175.
- 沖潮(原田)満里子. (2016). 障害者のきょうだいが抱える揺らぎ—自己エスノグラフィーにおける物語の生成とその語り直し—. 発達心理学研究, 27 (2), 125-136.
- 佐藤智恵. (2011). 自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析—「語られなかった」保育を枠組みとして—. 保育学研究, 49 (1), 40-50.
- 清水克博. (2019). 「実践的研究者として教師」の資質形成を図る過程についての検討—自己エスノグラフィーによる初任期の教育実践記録の分析を通じて—. 金城学院大学論集 社会科学編, 15 (2), 23-41.
- 鈴木ちひろ. (2021). オートエスノグラフィー—「児童性的虐待についてのマルチプル・リフレクション—レイヤード・アカウントの提言」(Ronai 1995) をテキストとした, 創作対話形式によるマルチプル・リフレクション—. 人間社会学研究集録, 16, 57-90. <https://doi.org/10.24729/00017378>
- 鈴木一成. (2018). 語られなかった体育の「主体的な学び」の検討—自己エスノグラフィーを参考にして—. 愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 67 (2), 35-40.
- 鈴木隆雄. (2010). 当事者であることの利点と困難さ—研究者として／当事者として—. 日本オーラル・ヒストリー研究, 6, 67-77.
- 高山真. (2017). ライフストーリーとオートエスノグラフィー. 哲学, 138 (3), 41-59. <http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara>
- 富安皓行. (2019). 現代日本におけるゲイの親密性の探求—性的／非性的な関係の二分法を超えて—. 共生学ジャーナル, 3, 26-53.
- 土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ. (2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚—TAE ステップを用いた理論構築—. 質的心理学研究, 19.
- 山本聡子・松葉百香. (2012). 子どもの登園における保育者の配慮に関する研究. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究, 18, 97-108.

(2022. 2. 1 受稿) (2022. 8. 9 受理)

(ホームページ掲載 2022年9月)